

「平和の福音を備える」

エペソ人への手紙 6 : 13 - 17

June.7.2026

エペソ人への手紙 6 : 13 - 17 (パウロ)

Preface

今朝も先週に続けて、エペソ 5 : 15 の「足には平和の福音の備えをはきなさい」という言葉について考えていきたいと思っております。

先週は、キリスト者とは、神が備えて下さった福音の履き物を履いて、立つべきところで置かれた場でしっかりと立つ神の兵士であることを確認いたしました。

この世の流れを前にして引き下がるのではなく、荒々しい怒涛の勢力、死と暗闇、墮落と肉の欲のままに生きる流れに向かってしっかりと立ち続け、暗い荒波の中そそり立ちながらいのちの光を放ち続ける灯台のように、また流れをせき止める岩のように耐えながら、永遠のいのちの番人、真理の見張り役として霊的戦闘をやり遂げるよう求められていることを確認いたしました。

ある意味アグレッシブな、攻撃的な面の信仰と言いましょうか、聖書の語る福音とは、世と対峙するしかない戦闘的な境遇に置かれているということです。

それに対して、今朝、学んでいこうと思っておりますのは、アグレッシブで、攻撃的な面を持ち合わせているものの、その内実は、平和であること、平和の福音であることを確認したいと思っております。

つまり、荒波の中どう立ち続けるのかと言いますと、柔和と、愛と、忍耐と、寛容という敬虔、信仰、イエス様のお姿に倣った謙遜な姿で立ち続けるということです。

Part One

アグレッシブだけれども、柔和な信仰姿勢ということをあれこれ考えていますと、卓球の試合が思い出されました。

卓球の試合を見ていて面白いなあと言いましょうか、凄いなあと思ったのが、所謂、攻撃型ではなく、守備型の選手の戦い方です。

相手の鋭い攻撃を全部受けて、持っているラケットで相手の攻撃をカットして、柔らかにボールを相手陣地に返すのです。

戦っている相手のボールの威力を吸収して、粘り強く相手の攻撃をしのぎながらしなやかに戦い、一見すると、迫力に欠けているように見えるのですが、最終的に勝ちを挙げるのです。

その戦い方、相手の強打を柔らかに受け止めながら、ボールを返していく戦い方が、とてもしなやかで、美しく見え、相当な技術が求められるだろうなあと思いますし、あそこまで相手の攻撃を柔らかに吸収出来るということは、攻

撃しようと思えば、いくらでも攻撃出来るほどの攻撃の知識もさることながら技術も持っているのだろうなあと思えてきます。

アグレッシブだけれども、柔和な信仰姿勢、キリストの満ち満ちた身丈にまで達する姿、その生き方とは、こういう姿なのかもしれないと思わされました。

そう思えた理由は、これまで出会って来た、「こんなクリスチャンでありたいなあ。こんなクリスチャンになりたいなあ」と思えた方たちが皆、アグレッシブだけれども、柔和でしなやかな信仰者だったように思えたからです。

イエス様は、とてもアグレッシブで、攻撃的な面を持ち合わせておられながらも、全くもってご自分のせいではない、人のために、人の罪のために、人の悪さを、人の悪を、人の間違いを、人の不正を甘んじてその身にお受けになり、十字架に架かれる程に、柔和で、寛容で、愛に満ち、忍耐をもってその救いの御業を達成されました。

十字架の死という一見すると、大敗北に見える、恥辱で、侮辱で、消極的に見える、力なく朽ちて果てて行ってしまったかのように見える生き方を全うされ、私たち人間の罪の赦し、罪の贖いという霊的大勝利を達成されました。

攻撃することばかり、自分の正しさばかり、自分のはけ口ばかり、自分たちの悔しさ、自分たちの無念さ、自分たちの納得し難さ、自分たちのやりきれない思いばかりを浮き彫りにし、表面化し、具現化し、表しながらイエス様を攻撃して、「遂に、十字架に架けて死なせることが出来た」と、「神に対して、また人に対しても勝利を挙げることが出来た」とサタン悪魔は大喜びしましたが、それこそ、奴らの大敗北を露呈することとなりました。

自分勝手な攻撃性、自分勝手な正当化、自分勝手な無念さ、自分勝手なやりきれなさ、自分勝手な正しさ、自分勝手な悔しさ、自分勝手なふて腐れ、自分勝手ないじけ、自分勝手なふさぎ込みばかりを前面に押し出しながら他者を攻撃するという、永遠の滅びに十分に値する罪なる姿を十二分にさらけ出し、自分たちの悪、自分たちの罪深さをさらけ出す結果を天地にさらしました。

悪魔悪霊ども自身が、また、奴らが作り出した闇の流れに従って生きる人々、イエス様から「まむしのすえたち。お前たちは悪い者で」と評される程に、十分に燃えるゲヘナに投げ込まれるに値する罪人であることを確固たるものとし、高慢という霊的大敗北の姿をさらしたというわけです。

他の誰でもない、私たち一人一人がそうだというわけです。

イエス様は、神の兵士のような確固たる戦闘姿勢でありましたが、その中身は、柔和で、謙遜で、平和でありました。

神であられながら、一切の罪を犯すことのなかった唯一の人として生きたお方、イエス様よりも正しい人、イエス様以外に正しい人なんて存在しないにも関わらず、イエス様はご自分の正しさを全面に押し出すのではなく、この世の、この世の人々の、ここにいる私たち一人一人の人間の間違った正しさ、不正な

行いを甘んじて受け、私たちを訴える代わりに、私たちにだまし取られるままでおられ、時に適った父なる神の裁き、報い、義の栄冠を待ちました。

Part Two

今、早天祈祷会で第一コリントを学んでいるのですが、その中の衝撃的な一節を見てみたいと思います。

コリント人への手紙第一 6 : 7 (パウロ)

今、コリント教会の中で最も大きな問題となっていることが、互いが互いを攻撃し合い、互いが互いに自分たちの正しさを主張し、決して譲ろうとしない、譲ったら永遠のいのちを失ってしまうんじゃないかと勘違いしているかのように自分の主張を意地でも通そうとする、もっと厄介なのが、自分の考える、自分の思う、自分勝手に信仰とはこうあるべきだという夢想のような自分のイメージの中で膨らませた信仰という皮をかぶった信念のような名のもとに、確信をもって、人を、相手を責め立てているということです。

「その不正、私が暴きましょう。その間違い、この正しい信仰の持ち主である私が明らかにしてあげましょう。あなたの信仰はまだ未熟だけど、私の信仰は洗礼を受けて何年も経っているし、生まれながらのクリスチャンだし、教会歴だってあなたとは比べ物にならないくらい長いし」というような思い、または、それとは逆に、「その長年培われて来た凝り固まった信仰という名を語っているだけの信念のようなものを、この新参者ではあるけれども、新参者であるからこそ見える鋭い洞察力をもって、あなたがた、歴だけ長い人たちの間違いを指摘して上げましょう」、または、ただ単純に、「私の方が道徳的、私の方が常識において勝っている、私の方が正しいに決まっているでしょ」という頑なな頑固さが、教会内で、人間関係において行き交ってしまっているということです。

「イエス様を信じている」と言いながら、「イエス様を愛している」と言いながら、イエス様がお定め下さった聖餐を受けながら、イエス様を礼拝しながら、「ごめんね。ごめんなさい。大丈夫だよ。僕もそうだし、私も同じ間違いを犯してしまうんだよ。一緒に祈りましょう。僕が、私が先に神の前に悔い改めます」という一言が出ずに、その一言を出すのにプライドが邪魔をして、「やっぱり、この人が間違っている」という神の兵士には求められていない攻撃性を、アグレッシブさを発揮してしまっています。

伝道者の書に、

伝道者の書 7 : 16 (パウロ)

あなたは正しすぎてはならない。自分を知恵のありすぎる者としてはならない。(パウロ)

という言葉がありますが、コリント教会の人々は、正しすぎる者であり、知恵のありすぎる者であってしまったようです。

神と人との前に、自らの間違い、自らの罪深さ、自らの浅はかさを率先して認める代わりに、自分の正しさ、自分の潔白さ、自分の思慮深さを表しながら、結局、神を、イエス様を否定してしまっているような状態に陥っていたということです。

Part Two

先週見ましたアブラハムという方は、自分の正しさ、自分の潔白さ、自分の思慮深さをもって相手を訴える代わりに、不正な行いを甘んじて受け、だまし取られるままでおり、神の裁きと報いと義の栄冠を待ち望むことを選び取り、結果的に、自分に対して不正を働き、だまし取っていったような人を救い出す側になって行きました。

誰との関係において？

甥のロトとの関係においてです。

一緒に父の家、親族の家を離れて出て来た家族、ロトの牧者たちと、アブラハムの牧者たちの間に争いが起こった時、アブラハムは、当然ながら年長者でありましたので、先にロトの間違いを指摘し、正す権限があり、住みたい土地を先に選ぶ権利があったにも関わらず、ロトを叱り飛ばす代わりに、「争いがないようにしよう。私たちは親類同士なのだから。私はあなたの言うとおりにするから」と譲歩し、ロトに住みたい土地を先に選ぶ権利を譲りました。

そのしなやかな言動こそが、神の望まれる平和の福音を備え履く者として取るべき行為だと思い、神の裁き、神の報い、神の栄冠を待ち望みました。

一方ロトは、非礼にも、アブラハムのその信仰による謙遜に、信仰による謙遜をもって応答する代わりに、アブラハムの謙遜に乗じて無礼を働きました。

そうして結局、先週もお話ししましたように、ロトは、「アブラハムよりも良い土地、良い権利、良い方を取れた」と確信したにも関わらず、アブラハムに救出される身となり、所有していた財産のすべてを失うという一文無しになってしまいました。

ロトは、神のみこころよりも、神が備えて下さった平和の福音の備えを履いてその信仰を発揮するよりも、自分の思い、自分の正しさ、自分の選択を選び取って行く人間的な攻撃性ばかりを重視してしまったようです。

そんなロトの姿は、神様がお示し下さった、とても分かりやすい私たちへの反面教師の姿でもあるように思います。

今エペソ書で、神がご用意下さった神の武具を身に着ける霊的武装について学んでいますが、武装だからと言って、誰か人を傷つける攻撃性を発揮するというわけではなく、その内容は、柔和であり、寛容であり、人を赦すことであり、神への信頼であり、神の前にある自分の罪を覚えることであり、人に対し

て平和であることを保つ謙遜さを発揮することなんだと思います。

Part Three

今日の御言葉を黙想し説教を準備していく中で、一つ、謙遜でもなく、柔和でもなく、ただ相手を傷つけてしまった、信仰という名の下にただ人を傷つけてしまった、間違った攻撃性を発揮してしまった私自身の苦い失敗が思い出されました。

大学4年生の頃の話です。

大学3年生の頃アメリカでイエス様に会って、不思議な聖霊体験をして異言が口から出て来るようになったり、日本に帰って来る前にロシアとカザフスタンに短期宣教に行った時には、悪霊につかれてしまった方のために祈ったりと、主イエス様が神であられ、目には見えないけれども、この目に見える世界を確かに動かしている霊的世界があること、また霊的戦いがあることに確信をもって日本に帰って来て1年程経った頃だと思います。

イエス様のことを、復学した大学の友人たちに伝えることに一番の喜びを覚えながら、週に一度、住んでいたアパートの部屋で学部友人たちを招いてバイブルスタディーをするようになっていました。

そして、かなり高ぶっていたように思います。

「僕は信仰に厚い、僕は霊的戦いの中を生きている、僕は神を信じているし、神なるお方を知っている」という変な正義感と言いましょか、間違った信仰的攻撃性に優越感を持っていたように思います。

ある日の夜、毎日お酒を飲まずにはいられない所謂アルコール中毒のような状態になっていた私の家族の一人から、当時住んでいたアパートに電話が掛かってきました。

生まれた時から私のことを本当に可愛がってくれ、大切にしてくれた人なので、久しぶりに話すのに嬉しくもありましたが、「ああ、久しぶりに話すのに、また酔っぱらってるよ」と、正直ちょっと鬱陶しい思いにもなりました。

始めは、「うんうん」と聞いていたのですが、だんだん腹が立ってきて、一向に電話を切ってくれる様子もなく、なんか愚痴っぽく、説教じみた話になってきたところ、ついに私の堪忍袋の緒が切れたと言いましょか、高慢な思いが爆発して、「主イエスの名によって、お前を酔っぱらわせている悪霊よ退け！ もう二度と、電話をかけて来るな！」と、啖呵を切るような言葉をぶつけて、悪霊退散みたいなことをしながら電話を切ってしまいました。

でも、これは大きな間違いでした。

その時から、父が亡くなってめぐみ教会で葬儀をするまでの14年間、会いもせず、話もしない程に、その家族を傷つけてしまいました。

じっくり話を聞き、祈り、一緒に教会の礼拝に行くことを勧め、寄り添う、平和の福音を発揮しなければならないところなのに、平和な福音が、その時の私には備わってもおらず、知ってもいなかったように思います。

ただ攻撃的で、怒りと面倒くささを交えて、聖書の御言葉の教えに全くそぐわない、聖書の御言葉を食してもいない、蓄えてもいない、聖書の御言葉の前にひれ伏し、聖書の御言葉の下に自分を入れ、謙遜にまず先に自分の罪を認め、人を赦し、寛容であり、柔和であるというイエス様の教えが全くない、自分勝手に「信仰とはこうなんだ」という信仰を偽った信念のようなもので、愛する家族を傷つけてしまいました。

父の葬儀が終わって家族で夕食を食べに行った時、「あの時は、ごめんなさい」と謝りはしましたが、不当な怒りを持って信仰を表現されたことに傷と言いましょうか、剥がしたらすぐに血が出て来るようなかさぶたとして残っていて、そのかさぶたが綺麗に癒えることを今でも祈っているところです。

平和の福音の備えを履くのではなく、怒りと感情と自分の正しさ、自分の体験経験にだけ頼った自信、特に厄介なのが、信仰に則っていると思い違いをしている間違った正しさを暴力的に発揮してしまったということです。

コリント教会の信徒たちもこんな感じだったのではないかと思います、クリスチャンと自覚している人たちのその正義感の厄介さ、中々気付こうとしない鈍感さ、中々そこから抜け出そうとしない確信じみた信念のような信仰心もどきの自らの正しさの主張。

自分の納得出来る、自分の目に入ってくる御言葉だけを好み、納得しにくい目にも入って来ない御言葉は読み流し、聞き流し、聖書の御言葉の下に自分を入れるのではなく、聖書の御言葉の上に立ち、自分の考えや自分の思想や自分の思いや自分の方法や自分のやりたいことを下支えしてくれるように思える聖書の御言葉はいくらでも引っ張り出して適用させようとするけれども、聖書の御言葉の下に自分を置く、服従させることは御免被りたいという、意識してか無意識か、そんな態度が、信仰じみた攻撃的な態度や姿勢を生み出すのではないかと思います。

平和の福音を備え、身に着けるキリスト教信仰とは、イエス様がお語り下さり十字架の死をもってお示し下さった福音の前に、自らがまず大いに間違いを犯し、大いに罪を犯しうる罪人であることを認めること、イエス様の十字架上の血みどろの姿が私自身の罪人としての姿であることを認めること、これが、平和の福音の備えを履くという実践の伴った信仰なんだと思います。

神の前に祈ると言いながら、ただ願掛けのような祈りを日々献げるのではなく、御言葉と向き合い、向き合った御言葉から語り掛けられ、語り掛けられたことを正直に真っ正面から受け止め、受け止めた御言葉をもって、また謙遜に自分を低くしながら祈ること。

これが、平和の福音の備えを具体的に履くことの基本の基なんだと思います。

実際にそのように生きた人として思い出される聖書の登場人物、皆さんの中にも思い浮かぶ人がいるかもしれません。

捕虜として捕まって行った先で、平和の福音を生きたダニエルと3人の友人たちだったり、奴隷として売られて行った先で、平和の福音を実践したヨセフだったりとあるかもしれませんが、もう一人、私自身聖書を読んで行く中で強烈な印象として迫って来た場面を生きた人、忘れることの出来ない人物がいます。

モーセです。

エジプトの奴隷という身分からイスラエル民族を救い出すために神がお立て下さった82歳という年齢のモーセの、明らかに自分よりも間違った判断、間違った態度、間違った姿勢、間違った行動を取っている人々の前にひれ伏すモーセの姿です。

神様から乳と蜜の流れる地を与えて下さるという約束を受けたにも関わらず、その約束を信じる事が出来ずに、自分たち勝手な思いで約束の地カナンの地に12名の偵察隊を送って偵察させ、その報告を聞いて、モーセとアロンとヨシュアとカレブの4人以外の200万人以上になる全イスラエルが絶望と恐れに勝手に包まれ、勝手に嘆き悲しみ、勝手に「なんて可哀そうな私たちなんだ。絶対にあの土地を私の手に入れることなんか出来ない。不可能だ。肉とパンを毎日食べていたエジプトを出てきて、遂に、この荒野で野垂れ死にしてしまう」と、神の約束の言葉なんか全く入って来ず、語られた神の約束の御言葉を勝手に拒絶し、勝手に不平不満、恨みつらみを並べ立てている場面です。

民数記14：1－10（パワポ）

神の約束を信じ続けているモーセとアロンに詰め寄り、神の約束の確かを説くヨシュアとカレブを殺そうとしている全イスラエルの姿です。

モーセも、アロンも、ヨシュアも、カレブも、一切悪くありません。

悪いのは、モーセとアロンとヨシュアとカレブの4名を除く、子どもから大人に至るまでの全イスラエルの方です。

なのに、そんな明らかに間違っている正しくないイスラエル民族を前にして、モーセとアロンが取った行動は、彼らの前にひれ伏すということでした。

民数記14：5（パワポ）

モーセとアロンはひれ伏しました。

自分たちの正しさを説く代わりに、人々の前にひれ伏しました。

彼らを訴える代わりに、むしろ彼らの不正な行いを甘んじて受け、むしろ、だまし取られるままで居るが如く、ひれ伏し、逆に赦しを請いました。

なぜか？

「目の前にいる人々を自分よりも優れた者と思うように」という神の言葉を、

後に来られる自らを低くされたメシアの姿を、神の前にあって他の誰よりも、
先ず自分たちの方が間違っているかもしれない、「自分こそ神の前にあってど
うしようもない罪人である」という遜りを、備えて下さった平和の福音を履き、
その履いた平和の福音の履き物を、「えいっ！こんな馬鹿なこと、こんな馬鹿
にされながらやってられるか！」と言いながら脱ぎ捨ててしまうのではなく、
しっかりと平和の福音の履き物を履き続け、履いた者としての言動を取り、そ
の責任を、霊的戦いを、遜りを、柔和を、忍耐と寛容を全うしようとしました。

神の前に先ず自分を低め、神の前に低めたことを人の前でも表し、そして、
神の裁きを、神の報いを、神のご判断を待ち望み、委ねました。

この時から42年前の、怒りに駆られて、自らおっ立てた信念のような信仰
もどきを振りかざしながらエジプト人を殺してしまったあの頃のモーセとは別
人です。

民数記12：4に、

民数記12：3（パワポ）

モーセという人は、地の上のだれにもまさって柔和であった。

と評される程に、神の手によって柔和な人へと変えられ、また、柔和な人へ
と変えられる神の御手と導きを受け入れ、柔和な人へと変えられることに信仰
を見出し、柔和な人へと変えられる、平和の福音を備えるだけでなく、備えら
れた平和の福音を履き続けるという実践を、自らの意思をもって選び取ってい
ったということです。

そして、明らかな間違いを犯している全イスラエルの民たちに、遂に主なる
神様が現れなさって、正しい裁きをなさいます。

民数記14：10－12（パワポ）

遂に、主なる神様の正しい裁きが下されました。

モーセとアロンとヨシュアとカレブ以外の全イスラエルを滅ぼすという裁き
です。

ところが、「やったぜ！ 遂に神様現れなさって、私に報いて下さった。お
前たち、ざまーみろ！」なんてことはモーセは一言も口にせず、思いもせず、
その代わりに、神の前に、また自分に対して恩を仇で返すという大きな罪を犯
したイスラエルの民たちのために、「神様、どうか彼らを御赦し下さい」と仲
保、仲裁に入ります。

民数記14：13－19（パワポ）

モーセは、彼らを訴えるどころか、不正な行いを甘んじて受け、だまし取ら
れるままでいながら、彼らのために祈ります。

「どうか彼らを御赦し下さい」と、主なる神様に全身全霊をかけて願い祈りました。

どなたかの姿を思い出しませんか？

イエス様です。

ご自分のことを、血みどろになるまで苦しめた者たちのため十字架に架かられながら、「父よ、どうか彼らを御赦し下さい。彼らは、自分で何をしているのか分かっていないのです」と祈られたイエス様のお姿です。

モーセは、後に来られるメシア、キリスト・イエスを表す人物でもあり、そしてモーセ自身、メシアの心を持つことを、持ち続けることをもってその信仰を表し、信仰を生きました。

全身全霊をかけて祈ったモーセの祈りに、神様が応え下さいます。

民数記 14 : 20 (パワポ)

これが、平和の福音を備え、備えた平和の福音を履き続ける人の姿です。

私たちは、平和の福音を備え、備えたならば履き、履いたならば、時と場合によって脱いだり履いたりせずに、履き続け、履き続ける生き方をするよう神様から求められ、期待され、そう出来るよう「わたしがあなたがたとともにいる」と語り続けて下さっております。

Conclusion

ゆえに、私たちは武装しましょう。

主イエス様が備えて下さった平和の福音の備えを履きましょう。

履いたならば、履き続けましょう。

そして、今、私たちそれぞれが置かれている場で、平和の福音の備えを履き続けるとは具体的に何なのかを考えましょう。

考えたならば、実践しましょう。

実践するために祈りましょう。

祈った時に与えられた思いを、実際に行いましょう。

私たちに与えられている福音は、実践した時に初めて、その威力を発揮します。

私たち皆が、平和の福音の備えを履き続ける神のつわものでありたいと願います。

お祈りいたします。

祝祷：民数記 14 : 5